



「すべての公立高校を男女共学に」

(共催学習会)

松田康子 (男女共学・ジェンダー部会長)

2012年10月13日(土)の午後 群馬県男女共同参画センターの大研修室において、「すべての公立高校を男女共学に」を掲げての学習会が開催されました。今回の学習会は、「ぐんま公立高校男女共学を実現する会」と「ぐんま教育文化フォーラム」との共催の形となりました。当日の様子を報告します。

開会のあいさつはフォーラムの倉林順一さんが「私自身は、男子校を40数年前に卒業したが、特に不都合はなかった。教員になって共学校を経験した時には生徒たちが全く自然だと感じた。今日はいろいろな立場から自由な発言交流が出来ればよいと考えます」と述べられ、その後司会の席に着かれました。



高橋久仁子さん

◇別学校数16は全国1位！

最初に高橋久仁子さん(群馬大学教育学部教授)が「別学の現状」について問題提起されました。

高橋久仁子さん「1994年家庭科が男女共修になったものの依然として食生活情報が女性にのみ向けて発せられていることに疑問を深めた。1998年から福島・群馬・新潟の順で3県合同女性サミットが開かれ、群馬では男女混合名簿と男女別学をテーマにワークショップをもった。1999年福島県が共学化をスタートさせたことから、その翌

年『ぐんま公立高校男女共学を実現する会』を立ち上げ、現在 13 年が経過する。別学を残すのは北関東 3 県のみとなり、『関東 3 県男女共学推進ネットワーク』を 2011 年にスタートさせた。今は閉塞感があり、会を消滅させないことが課題です」と述べられたのち、資料[全国の男女別学高校数/関東 3 県の男女別学高校数と別学校率]について解説されました。

◇人権に照らして公正なのか

次に内藤和美さん（お茶の水女子大学非常勤講師）が「なぜ共学をめざすのか」について 5 つの観点から論じられました。



内藤和美さん

観点を一列に列記すると①制度としての公正さ—もっとも基本的な問題②発達環境として③男女共同参画（性別について公正な）社会形成との関係④別学校が進学校に偏在していること⑤男女共学化の整理統廃合への従属となる。内藤和美さんは「①の公正さとは、人権に照らしての公正さ。性別理由の資格を問うのは“あり”なのか。共学反対の人は『伝統の堅持』を言うが、これは保守の立場であってなんらかの優位性ゆえに存続を求めるもの。また『多様な選択肢』と言うが、公立で別学が選択肢になってよいのか。公教育が保障すべき選択肢なのか」と迫り、2004 年群馬県の男女共同参画条例づくりに関わった際、「条例はよいが、共学はダメ」という県議グループの保守性に難渋した経験を話されました。

◇別学が残った理由は

次に紙上参加の形になった内藤真治さん（フォーラム）の「新制高校発足当時、群馬で男女共学はどう問題にされたか」の資料が代読で紹介されました。敗戦後来日した「アメリカ教育使節団」の報告（1946）に



紙上参加の内藤真治さん

は「小学校 6 カ年、あらゆる男女生徒のための下級中等学校 3 カ年、次に無月謝で希望者だれでも入学できる 3 年制の上級中等学校の開設を勧める。男女共学にすれば財政上の節約ができ、男女の平等を確立する助けとなるだろう。然し、教育の機会均等が保障される限り、過渡期中はこの水準において男女別々の学校を用いても差しかえない」と記されていた。

内藤真治さんは「群馬で男女共学が実現しなかった最大の理由は、学力の低下を恐れた旧前中など男子校の抵抗にあったように思われる。…しかしそれにしても群馬以外でも関東と東北地方に別学が多く残り、東京以西がほぼ完全に共学化された理由はよくわからない」と結んでいます。この結びについて高橋さんは『旧制中学は 5 年制なのに対し群馬の高等女学校は 4 年制』と資料にあるが、理由はこの点にある。関西～東京までは女学校は 5 年制であって、東北や関東で女子教育のレベルが低かった実態がその理由だと理解している」と解説されました。

◇おもしろかった発言交流

その後、発言交流の時間になりました。発言の概略を紹介します。

◆県教育委員会は沼田・沼田女子校の統合方針を地元の反対意見尊重ということで当面存続させたが自分は共学の論拠は正しいと思う。

◆典型的な良妻賢母教育を受けた。家庭科や芸術科目の時間数が多く、生徒総会で「普通科目の時間数を増やして」と要求する発言があったりした。

◆同窓会員になんの連絡もないまま出身女子校の同窓会役員が存続を県に要請した。いま世論を動かすことが大切。

◆男子校出身でバンカラ、下駄ばき通学だった。妻は福島県の女子校出身で、女子校はその後共学化した。進学成績などアップしているようだ。共学化はよいと思う。

◆一時女性の地位が高くなったが、女性になお男性に依存する部分が強いと感じる。

◆大学の例で、男性として入学した学生が苦悩のなかでやがて女性として卒業し、資格をもっていま生きる人がいる。別学の中で地獄のような苦しみを味わい、高校は中退していた。

◆共学化した県内高校の一期生だった。生徒会選挙で会長職を希望したところ、先生の「あー会長なんだ」の一言があった。先生の態度が変わらないと社会全体が変わらないと思う。(女子大学生)

◆男子校出身で女子校と合同ホームルームを経験した。40年経ってなんと合同ホームルームが再現され、140名が参加したと聞いた。おかしい。共学になるべきだ。現在の県教委は「お金がない」と学校の耐震工事もエアコンも順番待ち。予算があれば共

学化も進むのではないか。

◆学力神話があって、男子の中高一貫校、全寮制が理想形になっている。学力が幸せのエネルギーなのか大いに疑問。

閉会のあいさつで、実現する会の内藤さんは「学びとは、異なるものが接して生じずれの中から生まれる活動で、多様なものの共存の中に学びがあるのです」と男女共学を実現する必然性を語ってまとめられました。参加者は22名でした。



<共学部会として>

活動方針の一つに「教職員・生徒・保護者・県民とともにすべての公立高校の男女共学化について考える機会をつくります」と掲げています。共催学習会は試みの第一であり、その二は、利根沼田文化会館で開かれる11月11日の群馬県母親大会午後の部での6分間のステージ発表になります。今回の感想文の中から一部を紹介して今後の課題にしたいと思います。「学ぶことの大切さを実感しました。今回の資料を多くの人に学んでほしい」「まず問題に気付かねばなりません。別学は異常なのだ。男女平等については(学問的に)学習することが有効だと思うのです」。